当麻曼荼羅

曼陀羅という言葉は、文字通り円または円盤（まんだ）の境界（ら）を指し、小宇宙における神聖な領域を図像によって表現したものである。もっと簡単に言えば、それは神聖な空間の縮尺画像であり、砂、絵具、糸などのさまざまな媒体で描くことができる。当麻曼陀羅は、変相図で、浄土の描写とも見なすことができる。曼陀羅は、阿弥陀様の極楽浄土で再生を達成するために必要な過程を説明し、浄土佛教の基本経典である浄土三部経の一つ観無量寿経で説かれる内容を忠実に描いている。

曼陀羅の中央には、誰もが簡単に悟りを得ることができる阿弥陀佛の西方極楽浄土が描かれている。曼陀羅の中央の阿弥陀浄土図には阿弥陀様が蓮の上でお座りになっており、両脇には左に勢至菩薩、右に観音菩薩が並んでいる。前面の蓮池に蓮の花が咲き誇っている。蓮の蕾の中には小さな往生者が極楽浄土に生まれ変わり、熱心に阿弥陀様の説教に耳を傾けている様子が描かれている。前世での行いに応じて蓮の蕾は部分的にまたは完全に閉じられている場合がある。悟りを得るための阿弥陀様のお説教をあいまいにしか理解しない場合には悟りを開くまでに長い時間を要する。浄土におけるこれら九段階の再生は、一番下に描かれている。

曼陀羅の右側の区画には、十三の観法（定善十三観）が視覚的に描かれていて、それらは観無量寿経の中で浄土での再生を達成するために重要であると説かれている。曼陀羅の他の区画は、観無量寿経の追加区画を表しており、僧善導の解説にも言及している。

永観堂に展示されている当麻曼陀羅は、奈良の当麻寺に保管されている原本の模写である。当麻曼陀羅の多くの写本は、浄土宗西山派の創設者であり、永観堂の第十三代住職の証空上人（1177-1247）の奨励によって作成された。

証空上人は、1229年に初めて当麻寺を訪れた。それ以前の数年間、彼は善導の観無量寿経についての解説を研究していた。証空上人の訪問前、曼陀羅の内容はよく理解されていなかったが、証空が初めて当麻曼陀羅を見るやいなやそれが観無量寿経を図式化していることに気が付いたのである。

証空上人はまた、曼陀羅が観無量寿経の教えを広める方法としてその価値を理解した。証空上人は多くのコピーを依頼し、それを様々な寺院に流布したのである。鎌倉時代（1185-1333）模写された当麻曼陀羅は僧たちによって利用され、観無量寿経と阿弥陀様の極楽浄土について一般の人々を教育した。

当麻曼陀羅の原本は、各辺が4メートルもある巨大なもので、説教で使用する写本は、サイズを縮小して数多く作成された。永観堂の阿弥陀堂に安置されている曼陀羅は4分の1サイズの縮小版である。永観堂には原寸の曼陀羅もあるが、展示するには大きすぎる。

また、永観堂には、原本の曼陀羅が当麻寺に保管されるようになった経過を詳述した一連の記録がある。それは、阿弥陀様と観音菩薩に助けられ、藤原家の娘中将姫（747-781）が蓮の糸で作ったと言われている。中将姫は、4歳で「称讃阿弥経」に出会い、阿弥陀如来の救いを強く信じて、子どもの頃からこの経典を諳んじて

おられたという。中将姫が 5 歳の時、中将姫の母は亡くなり、彼女の父は後妻を迎えた。

家から追い出された後、中将姫は尼僧になり、やがて浄土で生まれ変わったと考えられている。中将姫の曼陀羅の制作は奇跡にほかならない。原本の当麻曼陀羅を制作するのに熟練した織工のチームでも 10 年の歳月が必要だったと推定されている。